

フェルナンド・ペソア『不安の書【増補版】』（高橋都彦訳、彩流社、二〇一九）刊行記念対談
杉田敦十山本貴光、紀伊國屋書店新宿本店、二〇一九年八月七日 配布物 Version 1.1

ペソアのほうへ——意識という風景 山本貴光

1. われわれはそれぞれいく人かであり……

ポルトガルの詩人、フェルナンド・ペソアが生まれたのは一八八八年、
没したのは一九三五年のことでした。日本の元号でいえば、明治二〇年
に生まれて昭和一〇年に没したことになります。一九世紀末から二〇世
紀はじめ、ヨーロッパでは第一次世界大戦（一九一四—一九一八）の時
代です。

と、あれこれお話しする前に、まずはペソアの文章をいくつかお目に
かけましょう。表現の幅をお見せするというよりは、私をはじめて読ん
だときからずっと惹かれ続け、ときおり思い出す言葉を選んでみました。

私たちのなかには 無数のものが生きている

自分が思い 感じるとき 私にはわからない

感じ 思っているのが誰なのか

自分とはたんに 感覚や思念の

場にすぎないのだ¹

ペソア詩がポルトガル文学に与えた影響は、たとえばべつの天体から落下してきた
巨大な隕石が地球に衝突して地表を大きく変えてしまうのに似ていた。

——アドルフオ・カサイス・モンテイロ

*

詩人はふりをするものだ

そのふりは完璧すぎて

ほんとうに感じている

苦痛のふりまでしてしまう²

*

わたしはいつも心のうちなる約束を守らない皮肉な夢想家だった。い
つも他人として、異邦人として、自分だと思っただけのものを偶然のように
観察し、自分の夢想の破綻を楽しんだ。³

*

われわれはそれぞれいく人かであり、大勢であり、自分自身を増殖さ
せる。⁴

*

自分のなかにわたしはさまざまな人格を創造した。たえず複数の人格を創造している。それぞれのわたしの夢は見られるとすぐに、たちまち別な人物に化身し、夢見るようになり、わたしではなくなる。⁵

*

人生は無意識に行われる実験的な旅だ⁶。

引用出典——1:『新編』不穩の書、断章『澤田直訳、平凡社ライブラリー』断章二六(三二頁) / 2:『ペソア詩集』澤田直訳編、思潮社「自己心理記述」(一〇頁) / 3:『不安の書【増補版】』(高橋都彦訳、彩流社、断章九一(一六六頁) / 4:同書、断章一二二(二二頁) / 5:同書、断章一五六(二六〇頁) / 6:同書、断章三三二(四三六頁)

ペソアは、別の文章で人間の意識を風景に喩えています。風景は、そこにあるもの、天候や陽光の具合、季節や時間帯によって、そのつど一度きりの出来事が移ろってゆくものです。それと同じように意識も多様な状態をとりませんが、私たちはそれを「自分」という一つの人格として捉えることに慣れていきます(また、そうしないと困ることもありますね。例えば「昨日約束した私と今日の私は別人だ」とか言われても)。

他方で、無理に一つの人格という枠にはめずに捉えることもできます。ペソアが示しているように、自分の意識を風景のようなものとして観察してみると、そこでは我が事ながら捉えがたいさまざまな現象が生じては消えてゆくのが実感されます。ペソアは、そうした風景としての意識を捉えようとして文章を書き続けた人でもありました。

このたび増補復刊された『不安の書』という書物は、ほとんどまるごと風景としての意識を描写することに費やされていると言ってもよいでしょう。また、その書物のそこかしこで太陽が昇り、雨が降り、風が吹き渡っているのは偶然ではありません。私たちは常になんらかの環境の中にいて、流転する風景のなかで自らの意識をも流転させています。ペソアの文章は、そうした機微を多様に捉えようとしているのです。

2. 異名者について

ペソアという人物がなにより興味を惹いて止まないのは、数々の「異名者」を生み出している点です。「異名者」^{いみょうしや}とは、ポルトガル語で「エテロニモ (heterónimo)」といえます(★1)。

★1——語源に興味がある人のために書けば、英語では「ヘテロニム (heteronym)」。「ヘテロ (hetero-)」とは「異なる」、「オニム (-onym)」は「名前」という意味です。これらのポルトガル語、英語は、古典ギリシア語の「ヘテロニモス (ἑτερονόμος)」に由来しています。やはり「異なる」を意味する「ヘテロス (ἕτερος)」と、「名前」を意味する「オヌマ (ὄνομα)」から成る語で、異なる名前を意味しています。ポルトガル語の「エテロニモ (heterónimo)」や英語の「ヘテロニム (heteronym)」は、この古典ギリシア語の音をそれぞれの言語に移しているわけですね。

例えば、アルベルト・カエイロ、リカルド・レイス、アルヴァロ・デ・カンポス、ベルナルド・ソアレスといった人びとは、いずれもペソアが作り出した異名者の名前です。と、見慣れない名前の羅列でややこしく

感じるかもしれませんが、いまは特に個々の名前を区別する必要はありません。なんだかいんな名前があるなあ、と眺めておきましょう。

ところで、ここで疑問が浮かぶかもしれません。「異名者」だなんて言えば、ちよつと不思議な感じもするし、いわゆる中二病っぽさもあるけれど、平たく言えば「ペンネーム(筆名)」とか「ハンドルネーム」のことなんじゃないの? と。一見するとそんなふうにも見えます。

ペンネームやハンドルネームは、多くの場合、本名とは別の名前を名乗るものことですね。例えば、夏目金之助が夏目漱石だったり、平井太郎が江戸川乱歩だったり、アリス・ブラッドリー・シエルドンがジェイムズ・テイプトリー・ジュニアやラナーク・シエルドンだったり、今岡純代が栗本薫や中島梓だったり。また、ネット上ではSNSその他の場所、本名ではなくハンドルネームを使っている人も少なくないでしょう。かつては「雅号」なんて言ったりもしていました。英語では「ペンネーム (pen name)」の他に、「スードニム (pseudonym)」と言いますが、これは直訳すれば「偽名」となりましようか。

では、「異名」はペンネームなのでしょうか。本名とは別の作家や詩人としての名前という意味ではペンネームに似ています。ただし、大きく違う点もあります。異名者は、それぞれが「別の人物」なのです。といっても、これだけでは何を言っているのか分かりづらいかもしれません。

この点について、ペソア自身が「異名について」という文章で解説しています。ちよつと引用してみましよう。

フェルナンド・ペソアの書くものは、それぞれ実名 *ortónimo* と異名

heterónimo と呼ぶうる二つの作品のカテゴリに属している。しかし、それらを無名 *anónimo* とか偽名 *pseudónimo* ということはできない。それは事実反することだ。偽名の作品は、異なる名前で署名されているとはいえず、作者がその人格において書くものだ。ところが、異なる作品は作者の人格の外にある。それは作者によって作られているというものの、ドラマの人物の台詞がそうであるように、完全な個性をもっているのだ。(★²)

★2——引用は「異名について」(澤田直訳、『海外詩文庫16 ペソア詩集』思潮社、二〇〇八、一〇八頁)から。この文章は、もともと「プレゼンサ」という雑誌に発表されたものです(第一七号、一九二八年二月)。その頁を見ると「書誌表 (*tabua bibliografica*)」と題されています。ペソアが自らの刊行物について書いた文章です。「異名について」は、訳者の澤田直さんがこのテキストから異名に関する部分を選んで訳したものです。

ご覧のように「偽名(ペンネーム)」とは違々と指摘していますね。どう違うのか。偽名で書かれた作品は、名前が実名とは違うだけで、同じ人物が書いたもの。それに対して異名で書かれた作品は、実名の人物とは別の人格をもった異名者が書いたもの、というわけです。言い直せば、異名者の作品は、ペソアとは別の人格の人物が書いているという意味です。カエイロという異名者は、ペソアとは別の人物だというわけです。「別人」は、ペソアにとって重要なキーワードの一つでもあります。

ひよつとしたら現代は、ペソアの異名者が実際にどんなものであるかを実感しやすいかもしれません。例えば、SNSで複数のアカウントを作って、それぞれ別人格として使い分けている人は、異名者として振る舞っていると言えそうです。Vuber (Virtual YouTuber) のように、コン

ピュータグラフィクスとヴォイスチェンジャーを使って、本人とは別の外見と声をもったキャラクターを演じるような場合、性別や年齢も自在に変えたり、それに合わせて話し方や身振りも変えたりするわけです。これなどは異名者として生きているといってもよいでしょう。もう少し古くは、二〇世紀後半に考案された人間同士で遊ぶテーブルトークロールプレイングゲームでも、参加者はめいめい、自分とは別の名前と属性をもったキャラクターになりきって、ゲームの舞台である架空の異世界で遊びます。そのつもりになれば、誰もが複数の異名者として振る舞ったり、活動したりできるわけです。

ところで、いま触れたテーブルトークロールプレイングゲームで遊ぶ場合、参加者ははじめにめいめいがキャラクターを設定します。キャラクターシートと呼ばれる紙に、名前や年齢や性別、ときには人間だけに限らない種族(例えば、トールキンの『指輪物語』に登場するエルフやホビットやドワーフなどのような種族、舞台設定によっては宇宙人なども)、身長や体重といった身体の特徴、知力や体力や俊敏さや魅力といったさまざまな属性、職業、使える言語、身につけている知識や技能などを詳細に選んで決めます。まさに自分とは別のキャラクター(人格)を作り出すのです。

先ほど述べたように、ペソアはたくさん異名者を作りました。どうやら生涯を通じて七十名以上の異名者がいたようです^(★3)。そのうち特に重要な三人の異名者について、ペソアは「設定」も作っています。名前、誕生日、職業、著作、さらにはホロスコープまで作っていたのです。彼はどうかやある時期から占星術にも凝っていたようで、蔵書にも多数の占星術書が含まれています(蔵書については後ほど触れましょう)。

★3——Wikipedia 英語版の heteronym (Literature) の項目では、主にペソアの異名者を例に解説されています。そこに七九名の異名者のリストが掲載されています。この数は、数え方によって多少変わると思われます。
[https://en.wikipedia.org/wiki/Heteronym_\(Literature\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Heteronym_(Literature))

ここで異名者の設定を確認しておきましょう。これも澤田直さんによる「WHOS WHO」からお借りします^(★4)。それと、これは余計なお節介ですが、見慣れない(耳慣れない)名前を認識するときは、音読してみると馴染みやすいかもしれません。

★4——引用は「WHOS WHO」(澤田直訳、『海外詩文庫16 ペソア詩集』思潮社、二〇〇八、一四九—一五三頁)

アルベルト・カエイロ (Alberto Caetano) ——自然詩人。一八八九年、リスボン生まれ、一九一五年に結核で死去。金髪碧眼、中背で蒲柳の質だがそうは見えない。両親を早くに失くした伯母に育てられる。年金生活者。教養とは無縁の野人であることを望み、高等教育も受けず、職にも就かず、一生の大半をリバテージョの田舎で過ごす。秘教的な思索を徹底的に推し進め、中途半端な神秘主義的汎神論を批判。代表作『羊飼』は「ものをあるがままに捉える(感覚的客観主義)」の実践。ペソア及びレイス、カンポスから師と仰がれる。

アルヴァロ・デ・カンポス (Alvaro de Campos) ——未来派詩人、造船技師。一八九〇年、ポルトガル南部のタヴィラに生まれる。身長は一七五センチ。痩身でやや猫背。髭はなく、頭は胡麻塩。マラーノ(ポルトガルの改宗ユダヤ人)的雰囲気がある。神父の叔父にラテン語を習う。中等教育を受けた後、スコットランドで造船を学ぶ。東方旅行後リスボンに在住。

代表作には長編詩『煙草屋』（一九三三）、『海のオード』、『勝利のオード』など。前衛的な詩人と激烈な論争家として知られる。

リカルド・レイス (Ricardo Reis) —— 秘教的詩人、医師。一八八七年、ポルトに生まれる。背はカエイロより僅かに高く、がっしりとした体格。髪はくすんだ茶色。イエズス会の学校で教育を受けたため半ばラテン主義者であり、自らの選択により半ばギリシヤ主義者となる。博学であり、ホラチウスを敬愛し、ポルトガル語の統辞法を侵犯することを理想とする。王制主義者だったため一九二九年にポルトガルを離れ、その後はブラジル在住。代表作はリディアを主題としたオード群。

もう一人、完全な異名者ではなく半異名者とも言われるベルナルド・ソアレスについても、ここで見ておきましょう。彼は『不安の書』の作者とされています。

ベルナルド・ソアレス (Bernardo Soares) —— リスボン市の会計助手。リスボン中心部バイシヤに住む独身者、フラヌール。ペソアとは自宅近くのレストランで知り合う。長大なモノログであり、様々な物語、印象、記述、考察の混淆とも言えるアンチ・ロマン『不穩の書』の著者。

〔山本追記——『不安の書【増補版】』（高橋都彦訳、彩流社）でソアレス自身が書いていることから補足すると、身長は一七〇センチメートル、体重は六一キログラム（断章一六）。母はソアレスが一歳の時になくなり、遠くで暮らしていた父はソアレスが三歳の時に自殺（断章二二六）。金箔師通り（ルア・ドス・ドウアドレス）にある事務所に勤める（断章一七他）。〕

それぞれが別の人格であるという意味がお分かりいただけたでしょう

か。ペソアは、こうした異名者を創造して、それぞれの異名者ごとに詩や散文を書いて発表したのでした。しかも、これらの異名者たちは、互いに関わりを持っていたりもします。例えば、カエイロの項目に記されているように、彼はペソア、カンポス、レイスの師でもあります。また、ソアレスの『不安の書』を読むと、彼がカエイロの詩を読んでいた痕跡も窺えます（断章四〇）。

3. ペソアは何を書いたのか——作品について

次に、改めてペソアの作品についてお話ししましょう。実は、彼が生前に刊行した本は数え方によりますが、五冊しかありません。

そのうち二冊は、一九一八年（二〇歳）に自費で出版した薄い英詩『アンチノウス (Antinous)』と『35のソネット (35 Sonnets)』。それから一九二二年（二三歳）に友人と作った出版社から二冊の、これも英語の詩集『英詩I-II』『英詩III』を出しています。もう一冊は一九三四年（四六歳）に出したポルトガル語の詩集『メッセージ (Mensagem)』でした。いずれもペソア名義によるものです。

異名者たちはどこへ行ったのでしょうか。『不安の書』はどうなっているのでしょうか。書物の形で出版したのは右のものだけでしたが、ペソアはさまざまな雑誌に作品を発表しています。例えば、一九二二年（二四歳）には雑誌『鷲 (Águia)』に「社会学的見地から見た新しいポルトガル詩」や「心理学的側面における新しいポルトガル詩」といった評論を、一九一五年（二七歳）には雑誌『オルフェウ (Orpheu)』に「ペソア名義で「水夫」「斜雨」、カンポス名義で「阿片窟」「勝利のオード」「海のオード」といった詩を発表しています。先頃、彩流社から翻訳が刊行された

小説「無政府主義の銀行家」も、一九二二年（三四歳）に雑誌『同時代（Contemporanea）』に発表したものでした。その間、没後に『不安の書』として刊行されることになる草稿も書き継いでいました。

ペソアは『メッセージ』を刊行した翌年、一九三五年（四七歳）で亡くなります。その後、友人たちが遺稿を整理するのですが、ペソアがポルトガル語、英語、フランス語で書き残した草稿やメモは、大きな箱（トランクとも）いっぱい、なんでも二万七五四三点ほどあったそうです。現在、この草稿類はリスボンの国立図書館で保存されており、デジタル化したものが公開されています。

つまり、私たちが今日手にするペソアの詩集や作品集のほとんどは、生前発表された作品や遺稿をもとに編まれたものなのです。これまで何度かペソア全集が刊行されていますが、それでもまだペソアの遺稿の全貌は掴み切れていないと言います。一人でありながら複数の人格であろうとしたペソアらしいといえば、後知恵が過ぎるでしょうか。

このたび彩流社から増補復刊を遂げた『不安の書（Livro de Desassossego）』（高橋都彦訳）は、ペソアの没後、遺稿から発見されたものです。といっても、完成してあとは印刷に回すばかりといった状態ではなかったようです。訳者の高橋都彦氏による解説「フェルナンド・ペソアと『不安の書』」によれば、生前雑誌に発表されたものに加えて、作家自ら『不安の書』用と分類しておいた断章（約三三〇点）と、研究者たちが遺稿のうち『不安の書』に属すと判断した断章（約一五〇点）があり、これが元となっています。また、断章をどのように並べるべきかという点について、明確なプランは残されていないようです。そんなこともあって、『不安の書』は編集する人によっても異なる書物として具体化

され、いずれかが唯一正しいという状態になりえない（なにしろ「正解」が不明なのですから！）、まさに「不安の書」でもあるのです。

現在、日本語で読めるペソアの商品については、「7. ペソアを楽しむためのミニブックガイド」でご紹介します。

4. 詩を比べてみる

ペソアと異名者たちの詩を読む楽しみの一つは、それぞれの詩を読むのに加えて、彼らの作風の違いを比べてみることにあります。ここではごく一部ではありますが、三人の異名者の詩を並べてみましょう。まずは、アルベルト・カエイロです。

わたしには哲学はない　あるのは感覚……
 自然について語るとしても　知っているからではなく
 自然を愛するから　こんなふうに愛しているからだ
 愛する者が知っていたためしはない　愛しているもの
 のことをなぜ愛するのも　愛が何なのかも……¹

*

花に　たとえば　美があるだろうか
 果実に　たとえば　美があるだろうか
 否　それらにあるのは　色と形
 そして実在だけだ
 美とは　じっさいには存在しないものの呼称にすぎぬ
 物から受ける快樂の代償にわたしが美を与えるのだ

美には何の意味もない

ではなぜ わたしは事物が美しいと言うのだろうか²

*

事物の唯一の隠れた意味は

隠れた意味などまったくないということ

どんな奇妙なことよりも 奇妙なことは

どんな詩人たちの夢よりも

どんな哲学者たちの思考よりも 奇妙なことは

事物とは見えるとおりのものであつて

理解すべきことなど何もないということ³

カエイロは、事物をあるがままに見ようとしていくようです。この同じ詩の別の場所では「自然」などというものは存在しない。ただあるのは、丘や谷や平野、木々や花々や草、小川や石といったものだと述べています。「自然」とはそうした具体的に存在するものではなく、それら人間がまとめて名付けている抽象的なものだ、というわけです。引用した詩で「美」は存在しないと語っているのは、そういう意味です。

ちよつと飛躍するように見えるかもしれませんが、これは映像の脚本を書くとき、最初に教えられることにも似ています。いくら脚本に「美しい花」と言葉で書いてみても、そのようなものは撮影できません。撮影できるのはただ、「白い百合」であり「薄い青色をしたデルフィニウム」だけです。カエイロは、ちよつとそんなふうにして、知覚される現象をそのままに見ようとしているようなのです（これは古来、哲学で検討されてきた認識論や現象学の問題とも通底しています）。

では、次にリカルド・レイスの詩を見てみましょう。

リディア ぼくらは知らない ぼくらは異邦人だ
たとえ どこに住もうとも

リディア ぼくらは知らない ぼくらは異邦人だ
たとえ どこで死のうとも すべては他人のもので
ぼくらの言葉を話さえない⁴

*

ぼくらを縛り 自由を奪うのは

ぼくらを憎み羨む者だけではない 愛する者も

またぼくらを縛る

神々よ 許してほしい ぼくが

あらゆる感情を捨て 何もない山頂の

あの冷たい自由をもつことを

望みが少なければ すべてを手にし 何も望まなければ

自由になる 何も持たず 願わなければ

ひとは 神々とひとしい存在となる⁵

*

わずかなものを望め おまえはすべてを手に入れるだろう
何も望むな おまえは自由になるだろう

自らに対する愛ですら

多くの要求をなし 自分をさいなむことになる⁶

リカルド・レイスは、エピクロスの徒のようです。エピクロスとは、紀元前四世紀から三世紀にかけて活動した古代ギリシアの哲学者です。今日では快樂主義の代名詞としてエピキュリアンという言葉が使われることがあります。エピクロスは、感情や欲望に悩まされず、迷信にも惑わされない心の平安（アタラクシア）を哲学の目的としていました。心が煩わされずにあることをよしとしたわけです。レイスは、引用とは別の箇所、エピクロスの名前を挙げて、その教えを範としていることを書いています。

まさにその通りにと言うべきか、レイスはどのようにして多くを望まず、心静かに生きるかを探究しているようです。冒頭で紹介した「ぼくらのなかには 無数のものが生きている」という詩もレイスのものでした。これは私の印象ですが、レイスの詩は『不安の書』のソアレスに通じるものが多いように感じます。また、細かいことですが「神」が単数形ではなく、「神々」と複数形になっているのも興味深い点です。キリスト教の神ではない、異教の神々が念頭に置かれているのでしょうか。

では、アルヴァロ・デ・カンポスはどうでしょうか。

いや 何もいらぬ

何もいらぬと言ったじゃないか

結論なんて くそくらえだ！

死ぬこと以外に結論なんてあるもんか

美学なんてまっぴらだ！

道徳なんて 口にしないでくれ！⁷

*

工場のどでかい電灯の刺すような光を浴びて
熱くなり おれは書きはじめ
歯ざりし 野獣のおれ これらの事物の美を讃えて
古代人の知らなかったこれらの美を讃えて

ああ 車輪よ ああ歯車よ 永遠の
怒り狂う機械の制御された痙攣よ！。

*

おれは歌う 現在を歌う そして過去と未来を
現在ではあらゆる過去であらゆる未来なのだから
機械や電光のうちにプラトンやウエルギリウスがいる
過去に生身のウエルギリウスやプラトンがいたからだ
そして西暦五十世紀のアレクサンドロス大王の破片や
百世紀のアイスキュロスの脳髓を熱する原子が
このベルトコンベアー ピストン はずみ車を通じて
唸り きいきいと軋み しゅうしゅうと囁き 大音響を発し がちゃ
がちゃ音をさせながら
おれの身体への過剰な愛撫 魂への唯一の愛撫となる。

ぶつきらぼうな訳文の文体の効果もあって、カエイロやレイスとはまた違った味わいの言葉です。工場で唸りをあげる機械の動きに、詩人自身が高揚を覚えているようでもあります。マシンのイメージのせいでは

ようか、どこか未来派のようでもあり、同時に私はウォルト・ホイットマン（二八一九—一八九二）の『草の葉』（初版一八五五／第九版一八九二）を読むときに感じる力強さに似た印象を受けます。煙草をふかし（二、煙草屋）、臓物煮を食べ（「ポルト風臓物煮込み」）、シボレーを走らせ、機械を讀めるカンポスは、どちらかといえば思索にふけりがちなカエイロやレイスと比べて活動している様が眼に浮かぶような異名者です。

せっかくなのでベルナルド・ソアレスの『不安の書』からもいくつか引用してみましよう。

倦怠とは何かを言葉で定義し、これをまだ経験したことのない人に理解させた者はいない。ある人たちが倦怠と呼んでいるものは、うんざりしていることに過ぎない。またある人たちがそう呼んでいるのは、不快感そのものだ。さらに疲労を倦怠と呼んでいる者もいる。しかし倦怠は疲労を含み、不快感やうんざりしていることも含んでいるが、それは、水が構成要素である水素と酸素を含んでいるようなものなのだ。そういうものを含んでいるが似てはいない。¹⁰

*

狭い意味で博識と呼ばれる、知識の博識があり、見識と呼ばれる、理解力の博識がある。しかしまた、感性の博識もある。¹¹

*

わたしの感じることは、それを感じるときの真の実体のうちにあるかぎり絶対的に伝達不能であり、それを深く感じれば感じるほど、それ

だけいつそう伝達不能になる。したがって、わたしの感じることを他人に伝えられるようにするには、わたしの感情を他人の言葉に翻訳しなければならぬ。つまり他人が読んで、わたしの感じたとおりに感じるように、わたしの感じるものとして、それを述べなければならぬ。そして、この他人が芸術上の仮定により、この人でもあの人でもなく、あらゆる人、つまり誰にでも共通する人なので、結局わたしのしなければならぬのは、感じたものの真の性質を歪めるとしても、わたしの感情を典型的な人間的感情に変えることだ。¹²

ソアレスは「感性の博識」という面白い言い方をしていますが、これはおそらく自分のことを述べています。感性がとる多様な状態を感知し、見分け、言葉にする人です。そうしたなかでも「倦怠」とは、『不安の書』を通じて最も頻繁に言及される状態の一つです。ここで引用した文に見られるように、ソアレスは「倦怠」という状態一つをとっても、それが人によって異なるものを指していると指摘し、その後で自らのこまやかな定義を示しています。

しかも、自分が感じていることをそのまま誰かに伝えることが不可能であるとも述べていますね。ここに示されている難問は、現代の心脳問題と呼ばれる問題にも通底するものです。私の心の状態やそこで生じている出来事は一人称の主観的な経験です。それを他人が理解できる三人称の客観的な形で捉えられるか。もし脳の状態を観察して、目に見える形で表現できたら、それをもって心の状態を捉えたことになるか。これが心脳問題の基本的な形です。ソアレスが述べているのも、主観的な心の状態を、どうしたら客観的に表現できるかという課題です。結局は、「主観的な心の状態をそのまま伝えることはできず、ただ「誰にでも共通する人」という形に翻訳、ということは変形する他はない、というわけ

です。ソアレスはそのようには述べていませんが、例えば、表現に使っている言語というものは、たいていの場合、私専用ではなく、他の人と共用しています。言葉自体がすでに主観をそのまま表現できる手段ではなく、たとえるなら既成の金型のようなものです。なにか私の心に生じた出来事を誰かに伝えようと思つたら、既製品の金型を選んで、その金型の形を通じて伝えるしかない、というわけです。そうした表現につきまとう隔靴搔痒な状態をソアレスはこまやかに感知しています。

以上は一例ですが、カエイロ、レイス、カンポス、ソアレスの文章を並べて、それぞれの違いを味わってみました。ぜひ同じようにして、詩集に載っている彼らの詩を読み比べてみてください。ここで述べた違いの他にも、共通点も見つかると思います。一人の詩人が書いた詩を読むのとはまた違った楽しみ方もできるのが、ペソアを読む醍醐味であります。

1…『羊飼ひ』、『ペソア詩集』（澤田直編訳、思潮社）、三六頁／2…同書、四三頁／3…同書、四六頁／4…同書、五三頁／5…同書、五三―五四頁／6…同書、五八頁／7…『リスボン再訪 1933』、同書、七〇頁／8…『勝利のオード』、同書、七九頁／9…同書、八〇頁／10…『不安の書【増補版】』（高橋都彦訳、彩流社）、断章一一八（二二―二二三頁）／11…同書、断章七二（二三―三三頁）／12…同書、断章九七（二七八頁）

5. ペソアについて

先ほど述べたように、ペソアは複数の異名者をつくりだし、彼らを通じて創作をしました。その作風には、いつもどこか醒めた目でものを見ている感覚や、確固たるアイデンティティとは反対の、自然の景色のよみよみに移ろい、無数の別人になりゆく自分という見方が反映されているように思います。私は、ペソアの出自にもそうした作風の根があるように

感じます。

というのも、彼はこういつてよければ、一種の故郷喪失者のような境遇に置かれた人でした。生まれはリスボンでしたが、ペソアが五歳のとき、父が亡くなり、続けて翌年には弟も失います。母はペソアが七歳のときに再婚。その相手は、南アフリカのダーバン在ポルトガル領事でした。そこで母とともにダーバンへ移住します。彼の地で英語に習熟し、詩作や小説の執筆も始めます。少しでも試してみると感じられるのですが、母語ではない言語でものを書いたり話したりするのは、それ自体、母語を使っているときとは別の人格になるような体験です。

また、異言語に親しむことで、母語の見え方も変化します。母語だけを使っているとき、それは空気のように自然なものに感じられるかもしれませんが、というよりも、自然であると感じることさえないほどです。ところが、母語以外の言語を学んで使うようになると、母語が当然のもののように感じられなくなります。母語が異言語化すると言いますか。イヤでも異言語との違いや共通点が目に入るようになるからです。

ペソアは英語に加えてフランス語も使っており、基本的にはこの三つの言語を中心に読み書きをしていたようです。後で紹介するように、彼が残した一二〇〇冊の蔵書のうち、実に半分が英語、およそ1/5がフランス語によるものでした。

これは単純な見方かもしれませんが、やはり生まれた土地を離れ、母語とは異なる言語を使うという経験は、人のある種の根無し草のようなものになります。なるほど彼は、異国の人に向けてリスボンの観光案内を書いていきますし、政治的文章などには一見すると愛国的な言動も見ら

れます。でもそれはおそらく、郷里以外の土地を知らない愛国者とは違って、一度は郷里を離れて相対化した目によるものだろうと思います。

わたしは何ら政治的志向や社会的志向を持ちあわせてはいない。しかしながら、ある意味で高度に愛国的な感情を持っている。わたしの祖国はポルトガル語という言語なのだ。

——『不安の書【増補版】』（高橋都彦訳、彩流社、五〇頁）

これはペソアではなく、ソアレスが書いていることですが、存外ペソアの真意ではないかという気がします。先ほど述べたように、ペソアはポルトガル語という祖国からも離れて距離をとる術を身につけた人でした。

ペソアは、一七歳のときリスボンに戻って大学に入りますが、卒業することなく退学します。以後、貿易会社のための商業翻訳を生業とするかたわら、英語やポルトガル語で詩や評論を発表し、友人たちといくつかの出版社を興し、いくつかの雑誌を創刊し、異名者として執筆を続け、一人にして複数の人として活動したのでした。

6. ペソアの蔵書

幸いなことに、ペソアが集め読んでいた蔵書が残っています。その数は一二〇〇冊ほど。現在ではデジタル化したものが公開されており、フイルではありませんが頁をめくって読むこともできます。本のそこかしこにペソアの書き込み（マルジナリア）もあって、読む人ペソアの息づかいを感じられます。

蔵書を公開しているウェブサイト「フェルナンド・ペソア博物館」では、蔵書全体を図書分類に従って、一〇のカテゴリーに分けています。

「空き」のカテゴリー（そこに分類されている本はありません）を除くと、実質的には次の九カテゴリーです。下に添えた数字は、それぞれのカテゴリーに分類されている本の冊数。先のウェブサイトに表示されている数字とはズレていますが、私がデータを整理してみた結果に基づいています。全部で一二一〇冊。実際には何巻かを一冊とカウントしているケースもままあるので、正確にはもう少し増えると思います。

・総記	52冊
・哲学／心理学	174冊
・宗教／神学	76冊
・社会科学／法学／経営学	94冊
・数学／自然科学	33冊
・応用化学／薬学／工学	15冊
・芸術／フラインアート／娯楽	13冊
・言語学／文献学／文学	668冊
・地理学／歴史学／伝記	77冊

どんな印象を受けるでしょうか。ちょっと大袈裟に聞こえるかもしれませんが、私はペソアの蔵書リストを見ながら、彼が幅広い関心を持つ百科全書的な志向をもった人だと感じました。もちろん偏りはあるものの、どのカテゴリーも本がまったくなくないということがありません。

最も多いのはやはり「言語学／文献学／文学」の六六八冊です。その大半は詩や小説などの文芸作品が占めます。ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』、アポローニオスの『アルゴナウティカ』、アイスキュロ

ス、エウリピデスの悲劇、オウィディウスはラテン語と英語の対訳版で。当時のポルトガル文学界では前衛詩人でもあったペソアは、古典にも親しんでいたようです（前衛とは、伝統を十分踏まえたところではじめてそれとは異なるものとして可能となる表現です）。ゲーテにダンテ、プルーストにジョイス、スウィフトやブラム・ストーカー、マーク・トウェインもあります。ブレイク、ブラウニング、バイロン、ユウルリッジ、ジョン・ダン、エマーソン、ホイットマン、ホジソン、ノヴァーリス、イエイツ、テニソンをはじめとする詩集が多々あるのは頷けるどころ。特に多いのはシエクスピア関連です。驚いたのは『透明人間』や『ドクターモローの島』を含めたH・G・ウェルズが一三冊もあるところ。チェスタートンやオースティン・フリーマン、ユーゴー、デイケンズ、オスカー・ワイルドなどもお気に入りようです。ポルトガルの作家で最もたくさん蔵書されているのは、バスコアエス。ロシア文学は比較的少ないですが、ツルゲーネフやゴーゴリの作品（仏訳）があります。

私が面白いと思ったのは、ペソアがミステリーを結構読んでいたことでした。雑誌やアンソロジーの他に、エドガー・アラン・ポオ、アーサー・コナン・ドイル、ドロシー・セイヤーズ、ヴァン・ダイン、ブラックウッド、オルツイ、フリーマン、ベントリーといった、日本でも翻訳で読まれている作家たちの小説が結構あります。「ペソアが愛したミステリー」と題してブックフェアを開催してみたくなります（需要があるかは別にして……）。

それから「××文学」といった本も目につきます。リストから拾ってみると、古典ギリシア文学、ローマ文学、古代エジプト文学、中世文学、ロシア文学、ハンガリー文学、イギリス文学、フランス文学、イタリア文学、アメリカ文学、中国文学、インド文学、ドイツ文学、ブラジル文学、

東方文学、ポルトガル文学などなど。これは鳥澁がましいにも程があることではあります。古代から現代まで世界中でこれまで書かれてきた文芸作品を知りたくて、同じように「××文学」といったアンソロジーや文学史の本を目にするつど集めている身としては（勝手に）親近感が湧くところです。

先ほど述べたように、最も冊数の多いカテゴリーは「言語学／文献学／文学」カテゴリーでした。ここでついながら、言語についても触れておきましょう。ペソアの蔵書を言語別に多い順に並べれば、こうなります。

・ 英語	608冊 (50・4%)
・ ポルトガル語	307冊 (25・5%)
・ フランス語	265冊 (22・0%)
・ スペイン語	16冊 (1・3%)
・ ラテン語	7冊 (0・6%)
・ イタリア語	2冊 (0・2%)
・ 古典ギリシア語	1冊 (0・1%)

ご覧のように英語の本が約半数を占めます。これとポルトガル語、フランス語の三言語で蔵書全体のおよそ九八%になります。言語に関しては、蔵書のなかには語学書もあります。言語としては、古典ギリシア語、ラテン語、英語、ポルトガル語、ドイツ語、エスペラント語、ヒッタイト語、バントウ語などです。ペソアは古典ギリシア、ラテン文学にも関心があったようで、古典ギリシア語やラテン語のテキストと英訳を対訳で提供するロウブ古典叢書 (Loeb Classical Library) も何冊か持っています（ここでまた余計なことを申せば、私も同叢書を集めています）。

す。

次に多いカテゴリーは「哲学／心理学」でした。何冊かの哲学通史の他に、プラトン、アリストテレス、マルクス・アウレリウス、パスカル、スピノザ、モンテーニュ、ラ・ロシュフーコー、マルブランシュ、ショーペンハウアー、ラッセルといった名前が見えます。中でも比較的多いのはフランシス・ベーコンです。ベーコンといえば、『学問の進歩』や『ノウム・オルガヌム』などで、学問全体を記憶・創造・理性という人間の精神能力によって分類してみせ、後にデイドロとダランベールが『百科全書』をつくる際に、学問全体を網羅するマップのお手本にしたのでした。ペソアがベーコンをどのように気にしていたのか、いずれ掘り下げてみたいと思います。

実は先ほどのカテゴリーでは見えてこないもう一つの特徴があります。「総記」に分類されている本のなかに、少なからぬ量の占星術書、神智学、フリーメーソン、薔薇十字、オカルト、魔術に関連するものがあるのです。ペソアは実際にたくさんの方のホロスコープをつくっており、その中には彼の異名者たちのものも入っていました。共に雑誌『オルフェウ』を刊行した親友のマリオ・デ・サールネイロが一九一六年にパリで自殺したことが、ペソアをそうした方向へ向かわせたと指摘する声もあります。この方面への興味は生涯続いたようです。

他にも、いわゆる理系分野の「数学／自然科学」「応用化学／薬学／工学」の本が都合四八冊ほどあります。数学や電気学、動物学、進化論、宇宙論、地球科学、神経科学、生理学、薬学の他に、同時代のアインシュタインによる相対性理論に関するものも見えます。また、ペソアや異名者たちの詩には、ときどきチェスが現れますが、蔵書にもチェスの指南書

が二冊ほどあります。

歴史の分野も、先ほどの言語や文学と同じように、古代から同時代まで、中国やイスラムなども含め、広く関心を持っていた様子が窺えます。宗教書では、日本の宗教に関する研究書も一冊ありました。

と、この調子で蔵書の全体を眺めていけば、まるできりもありません。いえ、誰かが生涯を通して集めた書物というものは、これもまた一つの表現になりえると思うのです。もちろん本人は、人に見せるつもりがなかったかもしれませんが、結果としてこうした蔵書には、これを集めた読んだ持ち主の興味関心が映り込むものです。ここでは詳しい書誌リストをおつけできませんが（なにしろ一二〇〇冊もあるので！）、蔵書の一端について少しご案内してみた次第です。

ご興味があれば「フェルナンド・ペソア博物館 (Casa Fernando Pessoa)」のウェブサイトにある蔵書コーナーを覗いてみてください。著者別、刊行年別、書名別、分類別など、さまざまな探し方ができるように工夫されていますが、特に希望がない場合、分類別でご覧になると見やすいかもしれません。

<http://bibliotecaparticular.casafernandopessoa.pt/index/classe/0.htm>

7. ペソアを楽しむためのミニブックガイド

ここでは、これからペソアを読んでみようという人に向けて本を紹介してみましよう。品切れ中の本もありますので、図書館などでご覧い

ただければ幸いです。

★1. 澤田直訳編『海外詩文庫16 ペソア詩集』（思潮社、二〇〇八）

本当は、これからペソアの詩に触れてみようという人に、最初におすすめたのがこの本です。なぜ「本当は」なんて持つて回った言い方をしているかといえば、重版未定の品切れ中だからなのでした。ペソア、アルベルト・カエイロ、リカルド・レイス、アルヴァロ・デ・カンポス（上で述べたように、これらはすべてペソアの異名者です）の詩と、ペソアによる散文、さらにはオクタビオ・パス、アントニオ・タブッキによるペソア論、澤田氏による解説、異名や関係者の小辞典ともいえる *WHO*、そして年譜までついた小さいながらペソア入門にもってこいの本なのです。一冊で、四人の異名者の詩を読み比べられるのもいいですし、ペソアについて概要を知りたい人にもうってつけ。復刊しないかなと願っています。

★2. フェルナンド・ペソア『新編不穩の書、断章』（澤田直訳、平凡社ライブラリー、平凡社、二〇一三）

現在、書店で手にしやすい本のなかで、まずペソアを読んでみようという人におすすめた本が二冊あります。その一冊はこの本。平凡社ライブラリーという文庫に近いサイズ。ページを開くと、まずホルヘ・レイス・ボルヘス、オクタビオ・パス、アラン・ボスケ、ジル・ドゥルーズ、ローマン・ヤコブソン、ジョゼ・サラマーゴ、ミシェル・ドゥギー、アントニオ・タブッキ、イタロ・カルヴィーノといった人たちがペソアについて書いた文章の抜粋が並びます。続いて「断章」パートでは、ペソアと異名者たちの文章から抜粋された一四一の断片がテーマごとに分類して配されています。そしてこの本の多くを占めるのが、異名者の一人、ベルナルド・ソアレスによる『不穩の書』『不安の書』の抄訳です。一

二六の断章が訳されています。訳者の澤田さんによれば、原著（といっても確固たる定本がある作品ではないのですが）全体の1/5ほどにあたるといいます。巻末の訳者による解説のほか、池澤夏樹さんによるエッセイもついています。書名に「新編」とあるのは、もともと二〇〇〇年に思潮社から刊行された旧版をもとに増補したものであるのを受けてのこと。

★3. 『フェルナンド・ペソア詩選 ポルトガルの海 増補版』（池上峯夫編訳、ポルトガル文学叢書2、彩流社、一九九七）

これからペソアを読む人におすすめた二冊のうち、もう一冊がこの詩集です。初版は一九八五年に刊行されたもので、一九九七年に増補版として詩が追加されています（どうやらペソアの本は、増補するたび内容が増殖してゆく傾向にあるようです）。この本も、ペソアを筆頭に、アルベルト・カエイロ、リカルド・レイス、アルヴァロ・デ・カンポスの四人の詩を堪能できます。本書の一部は、1の本にも転載されています。

★4. フェルナンド・ペソア『不安の書【増補版】』（高橋都彦訳、彩流社、二〇一九）

ペソアの異名者の一人、ベルナルド・ソアレスによる『不安の書』の完訳版です。かつて新思索社から刊行された『不安の書』を増補して、新たに断章六篇、「断章集」を増補したヴァージョンです（やっぱりペソアの本は、増補されて変化していくものようですね）。ペソア作品でもっともまとまった分量を誇る本書（六八八ページ！）を書棚に置けば、いつでもどっぷりソアレスIIペソアの世界に遊べるといえるものです。決断版をこの機会にぜひ。なお、彩流社のウェブサイトで、本書の試し読みもできますよ。

★5. 『フェルナンド・ペソア短篇集 アナーキストの銀行家』(近藤紀子訳、彩流社、二〇一九)

ペソアは詩だけでなく、小説も書いています。本書には表題作の「アナーキストの銀行家」とその補遺をはじめ、七篇の小説が収められています。「アナーキストの銀行家」は、誰よりもまっとうなアナーキストであると自認する人物が、検討に検討を重ねた末にアナーキストたることを貫くために銀行家になったという話です。ちよつとなにを言ってるか分からないかもしれませんが、本当にそういうお話なのです。訳者の近藤紀子さんによるまえがき「トランクを開けて」をまずはどうぞ。ペソアの原稿やメモが入っていたというトランクを覗いてみたくなります。

★6. フェルナンド・ペソア『ペソアと歩くリスボン』(近藤紀子訳、ポルトガル文学叢書九、彩流社、一九九九)

一瞬、何かかと思う書名ですが、その通りの本なのです。ペソアが箱一杯残した遺稿から発見された英語によるリスボンの観光案内書です。彼はどうかやポルトガルを異国の入びとにPRするためにこの文章を書いたようです。それが証拠に、海から船でリスボンに入港する場面から書き起こされています。上陸して税関の手続きを済ませたら、さっそくペソアのリスボン案内が始まります。「数々の史跡、庭園、有名な建築物、美術館——すばらしきリスボンの魅力を、あますところなくお伝えしたい」との予告の通り、彼は読者をリスボンの街の見所に案内しながら、その歴史と現在を解説してくれるのです。巻末に置かれたテレザ・リタ・ロペスによる「ペソアのガイドブック——発見の経緯と背景」は、ペソアの遺稿整理の困難も垣間見える興味深い文章です。

★7. アントニオ・タブッキ『フェルナンド・ペソア最後の三日間』(和田忠彦訳、青土社、一九九七)

イタリアの作家アントニオ・タブッキ(一九四三—二〇二二)は、ペソアに魅了された一人でした。彼はポルトガル語とポルトガル文学を学んで、後には大学で教師になっています。ペソアの作品をイタリア語に翻訳紹介し、自身も小説を書きました。特に初期の作品には、自分がなにかを探す人というペソアにも重なる人物が現れます。この『フェルナンド・ペソア最後の三日間』は、病床に横たわるペソアのもとをアルヴァロ・デ・カンポス、アルベルト・カエイロ、リカルド・レイス、ベルナルド・ソアレス、アントニオ・モーラといった異名者たちが訪れて、会話を交わしたり食事をともにしたりする様子を描いた小説です。ペソア文学へのなよりの手引きでもある本作は、残念ながら品切れ中です。

★8. ジョゼ・サラマーゴ『リカルド・レイスの死の年』(岡村多希子訳、ポルトガル文学叢書12、彩流社、二〇二二)

ペソアの異名者たちは、作家の創作を刺激するのか、ポルトガルの作家、ジョゼ・サラマーゴもリカルド・レイスを主人公にした小説を書いていきます(順番としてはタブッキよりサラマーゴの本のほうが先です)。物語はペソアの没後、一九三五年末、ブラジルに渡っていたリカルド・レイスがリスボンに戻ってくるころから始まります。これを二次創作といえ、当たらないかもしれませんが、一種のシェアード・ワールドものとして申しましょうか。リスボンのあちこちを歩き回るリカルド・レイスの足跡を地図の上で追いながら読むのもまた一興です。

★9. 金七紀男『ポルトガル史』(彩流社、増補新版、二〇二〇)

ペソアが生きた一九世紀末から二〇世紀はじめのポルトガルはどんな場所だったのでしょうか。そんな興味が湧いたら、ポルトガルの歴史を繙いてみましょう。先史時代から二〇世紀までの通史を描く本書は、うつつつけの一冊です。

8. ペソア・アーカイヴ

ペソアに関連するアーカイヴを三つご紹介します。

★Multi Pessoa

<http://multipessoa.net/>

ペソアの生涯と作品の紹介からはじまって、ペソアと異名者たちの詩や評論その他のテキストを提供するサイトです。詩によつては朗読音声もついています。詩の原文を見たい場合に便利です。

★Casa Fernando Pessoa

<https://www.casafernandopessoa.pt/>

フェルナンド・ペソア博物館のサイトです。このサイトのメニューにある Bibliotecas のうち、Biblioteca Particular がペソアの蔵書のデジタル版を公開しているコーナーです。

★Espólio Fernando Pessoa

<http://purl.pt/1000/1/>

ポルトガル国立図書館のサイトにあるペソア・コレクションです。手稿やノートを画像で閲覧したりダウンロードしたりできます。

さて、私のご案内はここまでです。

まずはペソアの著作を手に入れて、どこからなりとも読み始めましょう。ようこそ、フェルナンド・ペソアと異名者たちの世界へ！

*本リーフレットの執筆にあたっては、ミニブックガイドでご紹介した文献とウェブサイトその他、左記を参考にしました。著者・訳者のみなさんに御礼申し上げます。

・ *Obra Completa de Fernando Pessoa*, 8 Vols. (Kindle version).

・ Fernando Pessoa, *The Book of Disquiet: The Complete Edition* (Edited by Jeronimo Pizarro, Translated by Margaret Juli Costa, 2017).

・ João Gaspar Simões, *Vida e Obra de Fernando Pessoa*, Saedição (Publicações Dom Quixote, 1987).

・ José Paulo Cavalcanti, *Fernando pessoa: A Quasi Memoir* (Mimesis Edizioni, 2019).

・ 渡辺一史「フェルナンド・ペソア——ポエジーと文学理論をめぐって」(二〇二二)

